



幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2003

11

第102巻 第11号 日本幼稚園協会



世界に学ぼう!

デンマーク・スウェーデン・フランス・ニュージーランド・カナダ・アメリカに見る子育て環境

子育て支援

最新刊

世界の子育て環境がわかる。

子育て支援に関して、世界には優れた施策や市民活動を展開している国々が存在します。本書では、デンマーク・スウェーデン・フランス・ニュージーランド・カナダ・アメリカの6国を取り上げて、社会背景とともに育児理念・法制度・保育サービスの種類などを紹介。コミックやコラム、各種データも盛り込み、これからの子育て支援、社会のあり方を考えるうえで役立つ情報満載の一冊です。

本書の内容(目次より抜粋)

- デンマーク………親の参加が義務づけられる運営協議会/普遍主義とノーマライゼーションを理念に
- スウェーデン………世界一の女性就業率を支える保育サービス/1歳までは育児に専念
- フランス………卓越した家族給付と保育・教育システム/2時間の昼食とふんだんな休暇
- ニュージーランド………疑似/バウチャー制度による保育支援/伝統的な暮らしぶりが増加する離婚
- カナダ………市民活動に支えられる子育て支援/厳しい生活状況と高い女性の就労率
- アメリカ………保育行政の遅れを補う民間の体制/保守的な育児観と軽視される保育

汐見稔幸編著 大枝桂子構成・文 A5判 208頁 定価:本体1,800円+税



簡単
手作り



最新刊

中谷真弓の

エプロンシアター ベストセレクション

ポケットから生まれる、とっておきの物語!

エプロンシアターの考案者、中谷真弓先生によるベストセレクション。「名作赤ずきんちゃん」「これくらいのおべんとうばこ」「なぞなぞパンやさん」「誕生日おめでとう」を収録。エプロン・人形の作り方の基本、原寸大型紙付きで、すぐできる!

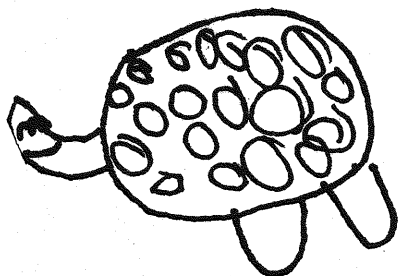
中谷真弓著 AB判 80頁 本文(カラー40頁/2色40頁)
定価:本体2,200円+税



キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第102巻 第11号



幼児の教育 目次

— 第一〇二巻 第十一号 —

© 2003
日本幼稚園協会

巻頭言 なぜ、今、幼・保・小の連携か

— 「子どもらしさ」の回復 — …………… 佐伯 胖 …… (4)

「遊び雑感」 その二 セルフコントロールの育ち…………… 吉村真理子 …… (9)

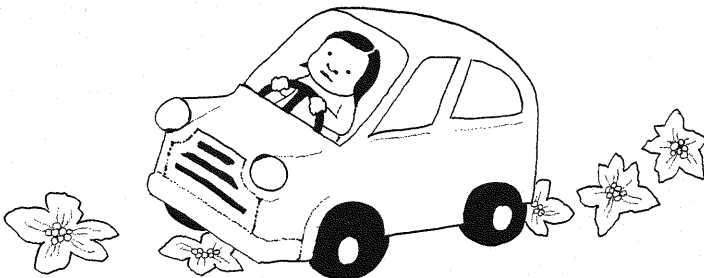
子ども理解の視点を広げていくために

— タビストッククリニック(ロンドン)のコース — …………… 清原 規子 …… (16)

障碍をもつ幼児の保育(16) — この子と出会ったとき —

見ること その三 — メガネ・鏡 …………… 津守 真・津守 房江 …… (22)

せつな系植物楽 植物ぼろぼろ 第三葉にんじん …………… 群馬 直美 …… (28)



「くり返し」のおもしろさー〇歳児クラスの生活よりー……………田辺 敦子…(33)

ある日……………(40)

子どもと出会う(6) 聴くということ……………岩田 純一…(42)

TO・NI・KARAひろば その十……………嶺村 法子…(50)

手づくり活動の楽しさすばらしさ(8)……………浜本 昌宏…(55)

保育の見なおし三年目ー指導計画の変遷からー……………入江 礼子…(56)

表紙絵／南塚 直子

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・佐藤 寛子

編集部／仲 明子





巻頭言

なぜ、今、幼・保・小の連携が

—「子どもらしさ」の回復—

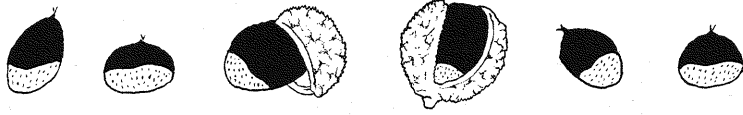
佐伯 胖

今日、幼稚園・保育所・小学校の連携が叫ばれているが、「なぜ、連携が必要なのか」ということになる、必ずしも明確な根拠が示されているわけではない。たしかに、就学前の「幼児」の教育について、バラバラな考え方が乱立する中で、政府が無為無策で良いはずもなく、当然、統一的な考え方に基づいて、小学校に入る前に当然身に付けていてほしいことが、多少のバラツキがあったとしても、最低限「ここまで」はちゃんと身に付けていて欲しい」という項目を洗い出し、それを幼・保が連携し



て、「就学前の子どもならば当然身に付けていること」について、ある程度の共通理解を得ておくことは大切であろう。就学前の子どもについて、「どういふことがどこまで、ちゃんとできるようになっていくべきか」についての統一的な考え方を持っておくことの必要性は、誰にでもわかる「幼・保連携」の理由の一つであろう。さらに、「どのような子どもに育って欲しいか」についての「望ましい子ども像」についても、幼・保の間で考え方が全く異なってしまうと、受け入れる小学校側はとまどってしまうだろう。したがって、幼・保の連携というのは、「保育する側」がなんらかの形で連携しあって、「就学前の子どもの教育」についての整合性を維持することのために、どうしても必要だといえよう。

それでは、「幼・保」と「小」の連携は、なぜ必要なのだろうか。保育者側の立場からすれば、なにしろ、「幼・保」の段階とはとつとも大きく異なる「小学校」という「学校」での生活に適応できるように、「幼・保」の段階である程度の「準備」をさせておくことが必要だという考え方が生まれるのは当然であろう。小学校側としても、「小学校がどういふところか」についてのある程度の心構えをもった子どもたちを受け入れたいに違いない。そのような保育者・教育者の立場から、「幼・保」と「小」との連携の必要性は、相互の「おおきな違い」を少しでも和らげて、子どもたちが問題なく適応できるようにすることの重要性から、誰しも納得するに違いない。



また、保育される側、すなわち「幼・保」の子どもたちと「小」の生徒たちにとって、相互に異年齢の子どもと接することから、それぞれが思いやりやあこがれを抱いて関わり合うことが、双方にとって大いに意義あることだと言いうことも、誰しも想像できることであろう。

このように考えると、幼・保・小の連携というのは、「幼・保」・「小」の間の意志疎通、すなわち、コミュニケーションを活発にすることによって、それぞれの「違い」から発生しがちなトラブルを少しでも減らすように、相互に「準備」しておく、ということが、その最大の理由なのだということになるだろう。

しかし、わたしはここで、これらとは全く異なる理由から、幼・保・小の連携の意義を訴えたい。

それは一言で言うと、今日あらゆるレベルの教育に「子どもらしさ」を育てることの必要性があり、その第一歩として、幼・保・小が連携し合って、「本当の子どもらしさ」を見つめ直し、その教育的意義をあらためて再確認しよう、というものである。

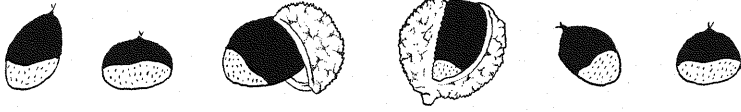
「子供さ」(childishness)、「子どもらしさ」(childlikeness)、「子供さ」(childishness)、「子供さ」(childishness)。

「子どもらしさ」というのは、思慮が浅く、衝動的で、自分勝手であり、他人への配慮



がないことを指すのであり、最近では大学生でさえ、「子どもっぽい」傾向が見られる。それに対し、「子どもらしさ」というのは、アーウィン・シンガーが『心理療法の鍵概念』（鏞幹八郎訳、誠心書房、一九七六年）で提唱しているもので、年齢にかわりなく大切な、精神的に健康で安定した人間の特性として挙げているものであり、物事に熱中し、不確実さに進んで挑戦し、世界の不思議さへの驚きを受け入れ、矛盾や葛藤を多様な発想で乗り越え、他者のことばをまっすぐに聞く、といったような性質を指すのである。

このような「子どもらしさ」は、幼児は「遊び」のなかで、ごく自然に発揮しているものである。ところが残念なことに、小学校に入り、中学校に進学するところから衰えはじめ、高等学校、大学へと進むにつれて、ほとんど見られなくなってしまう、というのが、今日の日本の現状ではないだろうか。もちろん、ごくわずかなオトナが、まさに「年齢に関係なく」この特性をもちつづけることができる。ノーベル賞級の研究をしている研究者、あるいは、NHK番組の「プロジェクトX」で取り上げられるような、地道な努力を積み重ねて困難を克服した「地上の星」たちのいきざまは、まさに、「子どものような」純粋な探求心にあふれたものであると言えよう。おそらく、彼ら／彼女らは、あらゆる困難にもかかわらず、たえず「おもしろがって」没頭し、自らの理想や目標の実現のために、「放っておくわけにいかないこと」に取り組みつ



づけたに違いない。

最近、教育界では、子どもたち（大学生さえも含まれるようだが）の「学力低下」が問題にされているが、わたしはこのような「子どものような心」、すなわち「子どもらしさ」こそが、本当の「学力」（「学ぶ力」）であるとしたい。計算ドリルや漢字練習で身に付ける学力というのは、「いつでも取り戻せる学力」であるが、人は「子どもらしさ」を一度うしなうと、二度と「取り戻せない」。

いま、幼・保・小の連携で取り組まなければならないことは、あらためて、子どもたちの活動の中から「子どもらしさ」を再発見し、それが年齢にかかわらず、生涯もちつづけるように育てるにはどうあるべきかをはつきりと打ち出して、それを中学校、高等学校、大学を過ぎても持ち続けられるべき真の「学ぶ力」（＝「学力」）として提起することではないだろうか。

（青山学院大学）

セルフコントロールの育ち

吉村 真理子

遊びは子どもの心身の要求のあらわれ

運動会が終わっても、集団遊びのおもしろさに目覚めた年長児はそのときの種目に新たなルールを加えながらいろいろなゲームを工夫し、グループ遊びが続いている。年中児もその中に加わる子が増えてきた。三歳児も以前にくらべると固定遊

具をうまく利用して遊べるようになったのは運動会で身体を動かすことに自信をつけたに違いない。

しかし、一方ではなぜかひとりで絵を描いたり泥団子作りに没頭する子どもの姿も目につく。子どもが帰った後の職員室で、「毎年、運動会の後で必ず泥団子作りを始める子がいると思わない？」

去年の日記を見るとやっぱりそう書いてあるのよ」「そういえばそうね、集団でエネルギーに遊んだ反動で今度は一人で静かに取り組む遊びがしたくなるのかしら」「芸術の秋っていうじゃない、だから環境の影響もあるのかな、なにかを作りたいと思うのは気候とか美術展のポスターなんかも関係あるかもしれないわね」と話題が広がっていく。その何げない会話の中には、一年の園生活での子どもの成長や遊びの流れが見えてくるような気がする。これまでの運動遊びを振り返ってみると、やはり気候と社会性の育ちが遊びの方向付けをしている、根底にあるのは子ども自身の心と身体のリクエストであることに気づかされる。

なわとびが流行し始める

朝の気温がひんやりしてくると、早番の職員は

門の側で子どもの登園を待つ間よくなわとびをしている。目ざとく見つけた子どもたちが「先生、すごーい」「かっこー！」「わたしもやりたーい」と取り囲む。「テラスにな



わを出しておいたからどうぞ」と声をかけると早速数人の年長児がなわをもってきて練習をはじめめる。なわを手に悪戦苦闘をつづけている子どもたちは間もなく汗びっしょりになりながら「見て、三回つづけて跳べた」「ほくなんか十回だつて平気だよ、数えてみて」とそれぞれ跳び始める。他人が見ているとすぐに引つ掛かり「あれ？ もう一回やるからね」とにぎやかだ。

運動量の多い遊びは寒い季節が最適なので、秋の深まりとともに跳びなわやボールなどを子どもの目につくところに用意しておく。それとともに

保育者が楽しそうにやってみせることで効果は倍増する。なわとびをしている職員はモデルの役割を果たしているのだ。モデルとは、子どもが「あんなふうには跳べるようになりたい」と具体的な目標を目に見える形で示してやることである。

別の場所では保育者が二人で長なわを回すと、保育者といっしょに何人かが挑戦してみるが、回転しているなわの間に入るのは勇気とタイミングをはかる要領が必要だ。何度か失敗しながらうまく跳べるようになると、その達成感を味わいたく長い列ができていく。なわを回す方は子どもの跳躍のリズムに合わせてやらなければ続かないので、腕が痛くなるのを我慢しながら「これが本当の一人ひとりに合わせた援助というものね、よくわかったわ」と悟りを開いたり「代わりましょう」「片方は鉄棒に結び付けても大丈夫よ」と保育者も日頃のチームワークを発揮する場になって

いる。

社会性の育ち

大なわ跳びは運動機能だけでなく、それぞれの子どもがさまざまな側面を見せてくれる。連続して途切れることなく一回ずつ跳んでは向こう側に出るリズムを楽しんでいるTは、みんなの動きをうっとりとして目で追い、誰かが跳びそこなうと「あーあ！」と溜め息をついていたのに、列に加わっていた四歳児がひっかかると「もう一回やっていいよ」と声をかけ「ほら、そこで跳ぶ」と熱心にコーチしている。

なわとびの得意なAは「先生、わたしも回してみたい、いいでしょ？」と片方の持ち手を志願してきた。みんなが気持ち良く跳べるように保育者と息を合わせて回せることがうれしくたまらないようだ。「回す方がむずかしいんだよ」と頬を上

気させている。Aに刺激されて幾人かが持ち手の交替をしたものの、跳びにくいので「やっぱりAちゃんがいいよ」と認められてAもうれしそうだ。それからは、上手に跳ばなければ上手に回せないという評価基準ができ、持ち手と認められることが目標になったのはおもしろいと思った。

そのうち、保育者のひとりが「私たちが子どもの頃はこういうのをやらなかった？」となわとびうたを披露すると「うん、やったやった」と早速うたに合わせて跳びはじめ。子どもたちもおもしろがって加わり「大波小波」「ゆうびんやさん」「くまさんくまさん」などを歌いながら大喜びで跳んでいる。おもしろいのは職員の出身地で少しずつ歌詞や動作が異なっていて「同じ県なのにどうして異なっているの」「ふしぎね、先生のとことは離れてるのにいっしょだわ」と調理師や看護婦も交えて話はずんでいる。そのことを「園

だより」で紹介すると、お母さんたちからもいくつかのパージョンが寄せられ、お迎えに見えたときの園庭でなつかしそうになわとびの仲間入りをされる方も出てきた。ここでも「あら、いっしょね、おたく何県？」とミニ県人会が開かれたりする。

なわとびうたには跳びながら会話やじゃんけんゲーム、表現遊びなどドラマチックな要素が加わるので、難易度が高い運動も楽しそうにクリヤーしている。こんな遊びを考え出した昔の人の知恵に感心したり、ほとんど全国にゆきわたっている伝播力の不思議さを考えさせられる。「くまさんくまさん」などはあきらかに外国から入ってきたものであろう。また、なわとびうたの歌詞が時代や地方によって少しずつ違っているのは遊びにつ



きものの即興性によるもので、現在でも子どもたちは言い間違いをそのまま定着させたり即興の歌詞を付け加えたりしながら楽しんでいる。

それにしても、なわ一本でなんとたくさんの遊びが展開できることか。毛糸をくさり編みした紐で、高跳び“ワゴムをつないでリズムカルに跳ぶ”“ゴム跳び”なども“なわ跳び”のバリエーションと考えられる。こうした遊びが寒い冬の季節に流行するのは跳躍することで身体が暖まることを体感した子どもの知恵と言うべきかもしれない。

ボール遊び

サッカーは年間を通して男児の人気スポーツだが、ドッジボールはどちらかというと寒い季節に男女の別なくよく遊ばれている。「なんだか暑くなってきた」と顔を真っ赤にしてマフラーやジャンパーを脱ぎはじめる。ボールに当てられまいと

狭いコートを走り回るのは相当の運動量とみえ「わかった、寒いときに走るとあつたかくなるのは身体の中でお湯がわくんだよ、ほら口から湯気が出てる」とうがった発見をする子もいる。

サッカーは蹴る技術やボールが難しそうなので年中児はあまり仲間に入らないのに、ドッジボールはおもしろそうだと年中児も加わってくる。ところがたまたましている子は標的になりやすくすぐに当てられるのでゲームを楽しむ暇もなく外に出されてしまう。見かねた年長児が「小さい子は三回まではいいことにしようよ」と助け舟をだす。おかげでよくわからないままコート内を右往左往しながらゲームの楽しさを味わうことができた年中児は、次の日も積極的に仲間に入ってくる。そのうち、ボールの行方を追いながら反対の方に走る要領を身につけていくようになった。

ここでも感心するのは仲間に加わった年少の子

に対する配慮のこまやかさであるが、実は自分たちもドッジボールを覚えたての頃、すぐに当てられ出されてしまうので三回まで、二回までと申し合わせをしたことを思い出したことに違いない。なわとびのときもそうだったが、実状に合わせてルールを変えていく柔軟さは、相手への思いやりもあるが、みんなでゲームを続けたいための工夫でもある。ここでルールにこだわっていればゲームは度々中断し、理解できないものはやめるほかはない。それでは遊びの楽しさは失われてしまう。

しかし、年長児だけでサッカーや「はじめの一步」などをしているときは厳密にルールを守ってイエローカードを出したり、ちよつとした身動きも見逃さないのは、自分たちの実力に対する誇りの現れであろう。

ボールと子どもの付き合いは乳児の頃から始ま

る。フレーベルの第一恩物が球形であることもわかるように子どもは球形のものが大好きだ。特にボールは弾力があり両手で持ったり抱えても身体に優しく、思いがけない方向に弾

んだり転がるので遊び道具としておもしろさは尽きない。もう一つの特徴はボールを投げる（つく、蹴る）目標としての対象をもつことである。お座りができるようになると母親は子どものおなかを目かけて鈴のはいったボールをそつと転がす。あかちゃんは喜んでバタバタ叩き転がるともう一回やつてと言わんばかりに全身でせがむ。母親が「ちようだい」と両手を差し出すと、あかちゃんは身体ごとボールを母親の方へ放つてよこす。相手とのキャッチボールの楽しさを知ったのである。現在遊んでいるサッカーやドッジボールで相



手の方向へのパスもその延長線上に生まれたといえよう。

人間同士のキャッチボールは相手次第で自分の能力が引き出される。受けやすい位置にボールを投げてもらおうとキャッチしたときの何とも言えない快感が味わえる。反対に、ところかまわず投げてこられると受けそこなつてボールを追いかけるのに苦勞させられる。そうした経験は、やがて相手が受けやすいように方向と球威をコントロールする努力を引き出す。

お正月のまりつきは一人遊びのようだが、地面相手のゲームでもある。地面が返してくるタイミングをとらえなければ続かない。自分とボールの性質（よく弾む、弾まない）や地面の固さなど三者の力関係を調節するのだから、結局自分自身を相手にキャッチボールをしていることになろうか。

会話もまた言葉のキャッチボールである。絶えず相手の気持ちを受け止めながら相手に快い言葉を返すことができたなら会話の楽しさはキャッチボールのおもしろさに匹敵する。

このように見てくると年度後半の運動遊びは道具（なわやボールなど）の特徴を知り、それを活かして自分の動きをコントロールする敏捷性、巧緻性を磨く遊びが登場してきているように思われる。身体の動きのコントロールは感情のコントロールにも影響を与え、相手の気持ちに添う、自分の行動を全体の動きに合わせて調節しようとする人間的に成長する姿が見られて頼もしい。つくづく子どもの心と身体は切り離せないものであることをこの時期の遊びから実感させられている。

（元松山東雲短期大学）

子ども理解の視点を広げていくために

―タビストッククリニク（ロンドン）のコース―

清原 規子

一九八七年から始まった、日本の乳幼児精神保健の会「フォーウインズ」（世話人代表 澤田敬）が、一九九八年長崎でありました。その時の講演に、タビストッククリニクからジュリエット・ホプキンスが来られ、乳幼児にとって、保育者に精神的にも肉体的にも守られた環境の大切さを、ボルビーとウイニコットの説をもとに話され、そして、タビストッククリニク

クの、赤ちゃん観察のコースの話をされました。幼稚園で働いていた私は、彼女の話に魅せられて、二〇〇一年夏、ここ、ロンドンにやってきました。

タビストッククリニクのこと

もともと一九二〇年、主に戦争による精神的な病を抱えた人への治療から始ったタビストッククリニク

では、現在は、乳幼児から成人までの精神保健の治療と専門家の育成に力を入れています。スタッフは家族心理療法家、子どもの心理療法家、心理学者、精神分析家、精神分析医、ソーシャルワーカー、看護婦などさまざまです。専門家育成のコースは、子ども、思春期、成人やカップル、またさまざまな障害、抱えている問題に応じ、七〇以上ものコースに分かれ、そしてほとんどのコースに、学生は皆、働きながら通っています。

私の通っているコースのこと

私が現在通っているコースは、精神分析的赤ちゃん観察コースといえます。最初は、精神分析ということばに、自分の中になにか粋ができてしまうのではないかとちよつととまどいを感じたのですが、通い始めてみると、子ども理解の視点の基本が、学生時代に、愛育養護学校での実習で先生方と話し合った時のもの

や、幼稚園で働いていた頃に、同僚たちと話していた時のものとかかなり共通点があり、逆に視点が広がって、とても興味のあるものでした。

このコースは、週に二日夕方から、あるいは一日を使つて行なわれ、いくつかのセミナーによつて構成されています。イギリス人だけでなく、いろいろな国の人が参加しています。

基本的には、一年目のセミナーは四つで、フロイトの論文を読むセミナー、最近の子どもの発達に関する論文を読むセミナー、仕事現場からのレポートをもとに話し合うセミナー、そして赤ちゃん観察をもとに話し合うセミナーです。二年目は、メラニークライン等の論文を読むセミナー、パーソナリティーの発達を読み解くセミナー、幼児観察を話し合うセミナーと、仕事現場、赤ちゃん観察の五つになります。一応二年のコースだけれど、ほとんどの学生はフルタイムで働いているので、皆、自分のペースに合わせてセミナーを

選び、三年、四年と時間をかけて、勉強しています。

私は現在二年目のセミナーをとっているのですがその四つのセミナーの内容を次に述べたいと思います。

仕事現場からのレポートをもとに

話し合うセミナー

このセミナーは基本的に五人の学生、そして、子どもの心理療法家として働いている人がリーダーとして一緒に話し合いに参加しています。学生は、ソーシャルワーカーとして働いている人、自閉症児と働いている人、小学校で手が必要な子どもについて働いている人、あるいは担任等とさまざまです。私自身は、プレイグループでボランテニアとして二歳半から五歳までの子どもたちと半日一緒に時を過ごしています。他にも、中学校の先生や病院で子どもと働いている人もいますし、時には、ジャーナリスト等もいるようです。

自分の現場のある日の子どもとの関わり、子ども同

士の、あるいは他のスタッフとの関わり、また、遊びや表現、さまざまなことを見たまま、感じたままに記録をとり、セミナーでは、参加者がその記録から、感じたこと、思いついたことを自由に話していきます。

現場で自分がどう感じたかということは、その子どもの世界を理解していく上で、大切なものとして見えます。また、話し合いの中で出てきた意見も「子どもの理解」という視点から、同じように大切に扱われます。学生は活発に思いついたことを話します。いろんな見方が出てきます。どの見方も、なるほどそういう見方もあると、自分の中の枠が広がっていきます。

自分自身の興味深い体験としては、今日はこの子とじっくりと付き合ってみようかと思いつながらプレイグループにいくと、向こうからも近寄ってきて、遊びの中でいろいろな楽しさ、葛藤などを子どもが表現してくることで、顔の表情も私に理解して欲しいといっているようで、思わず、いつも以上にその子に真剣に

関っている自分を感じます。そういうこともすべて、セミナーの中で話していきます。

赤ちゃん観察をもとに話し合うセミナー

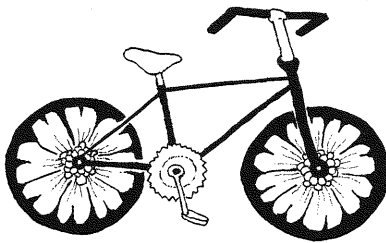
このセミナーも、基本的には五人の学生と一人のリーダーで構成されています。私たち学生は、観察する赤ちゃんを探すところから、このセミナーでのプロセスが始まります。出生後できるだけ早い時期から二年間、毎週決まった日に一時間、ご自宅にお邪魔して赤ちゃんを中心に、特に親とのかかわりや兄弟児とのかかわりを見ていきます。

小さな、身体の動きや顔の表情、また、他の人たちとのやり取りやものとのやり取りを丁寧に観察していきます、その中で感情の動き、心の動きに焦点をあてていきます。親と目が合った時の満面の笑みや、怖くてどうしようもないと大泣きする姿、そしてそれを優しくあやす親とほっとして落ち着いていく赤ちゃんの

姿、また、一つのおもちゃをじっとみつめながら握ったり離したりしている姿等から赤ちゃんの中にどんな世界が生まれ育っていつているのかをじっくりと二年をかけてみていきます。

このセミナーも、発表されたものから私たちが自由に感じたり思ったりしたことを話していきます、赤ちゃんやその家族への理解を深めていきます。

妊婦の方と交渉を進めている時は、妊婦も学生も共に不安だったりしますが、学生の不安はセミナーの中でじっくりと聞かれ、学生は次第に観察者の立場としての自分に自信を持てていきます。時には、親と子ども葛藤の場面などにも出会ったりしますが、批判することなくそこにいる、



と”として、赤ちゃんの親にとつても、その学生はその場にいるだけだけれど、大切な存在となつていきます。また、聞くだけだけれど、大事な話し相手にもなつたりします。

最近の子どもの発達に関する

論文を読むセミナー

前述の二つのセミナーよりも少し大きなグループ（十人前後）で、毎回必読の文章が三本ほどあり、それをもとに自由に話していきます。一年を通して、受胎時期から誕生、ことば以前の親とのやりとり、感情やことばの発達など、子どもの発達の流れに沿って、また、その発達に絡み合ってくるいろいろな要素に関するものを読んでいきます。

精神分析的な見方のもの（つまり、乳幼児の心の世界に焦点をおいたもの）を基本に、たとえば、低体重出生児に対するケア等の、特別の状態や虐待、障

関するものや、発達心理学や神経科学、認知心理学等の視点から乳幼児を見つめていったもの、また、一生涯という視点の中での乳幼児期を考えていったもの、保育施設での養育に焦点を当てたもの、文化や家族関係―父親、兄弟、双子等―の視点から乳幼児の心の発達を見つめていったもの等も盛り込まれていて、いろいろな視点から子ども心の世界を考えていくことができます。

時には、著者による講義があつたり、ビデオ鑑賞があつたりします。文章からだけでなく、講演者からかもし出されるその場の空気からも学んでいったりしています。

フロイトの論文を読むセミナー

精神分析的視点の発達を歴史的に学ぶということ、十人前後のグループで、精神分析を生み出したフロイトの文章を読んでいきます。彼が神経科医だった

ところから、患者を診ていくうちに無意識の世界の重要性に気づき、その治療法を試行錯誤しながら生み出し、精神分析学を構築していくプロセスは読んでみると結構面白いものでした。

特にこのセミナーでは、フロイトの考え方の発達を、臨床現場の具体的なケースの文章をもとに構成しているのが、患者から具体的に表現されたものを私たちも読みながら、フロイトがその表現にどのように向き合っていたのか、時代背景なども考慮に入れたりしてみたいと思います。

時には患者への対応に失敗もしながら、真摯に患者の心あるいは病気の理解を考えていつている姿に、私の仕事現場での子どもと向き合うプロセスそのものの大切さ、また、自由にいろいろな可能性を考えていくことの大切さを感じています。また彼は患者からの表現をそれは丁寧にみていて、乳幼児期の大切さを心の中で揺れる動く感情や心の世界への気づきから謳って

います。それは現在、私たちが保育現場で子どもと関っていく中でいつも大切にしているものと共通するものだと思います。

ロンドンには特に多国籍の都市で、難民も多く住んでいます。地域によっては、学校に来ている子どものほとんどが、英語が母国語ではない、それぞれ違った言葉を話しているというところもあるようです。そして言葉よりもその行動から、彼らに特別に手をかける必要があると感じている教育者が多くいます。子どもの心理療家もかなりいるようですが、まだまだ足りないようです。だからこそ、タピストククリニクのような専門家養成機関は国としても非常に必要であり、これから更にその存在が重要とされることと思っています。

(ロンドン在住)



障害をもつ幼児の保育(16)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

見ること その三—メガネ・鏡

子どもにとって関わりの深い『見るための道具』とい
えば「メガネ」とか「鏡」がすぐ思い出されます。メガ

子どもとメガネ

ネは対象をよく見るためのもの、鏡は自分を見るための
ものと考えられますが、保育の中ではどのような意味が
あるのでしょうか。

F うちの孫はメガネにとっても興味を示しますが、障害
のある子たちもそれは共通のことだと思うのですが。
M そう、どの子もメガネに興味を持ちますね。

興味を持ち方は時により人によって違いますが、メガ

ネに対する関心には何か神秘的なものすら感じさせられます。始めはメガネは顔についている物として興味を持つのでしたが、それから次第に『お父さんのメガネ』『おばあちゃんのメガネ』というようにその人と結び付いて捉えられるようになりますね。

F 『保育者の地平』（ミネルヴァ書房）にあなたが書いているN君の話も亡くなったお父さんがメガネをかけていたことに結び付いていましたね。あの話をしてください。

M N君のお父さんが亡くなった後、しばらくN君は私の机の上からメガネをとって若い男の先生にかけさせて、ときには一日中持っていることもありました。お父さんはメガネをかけていましたから、若い人を見るとお父さんのように見えるのかと思いました。ある日私は午後から講演に出かけなければならぬとき、Nくんは私のメガネをどうしても放しませんでした。ほかの人のと取り替えてもらおうとしたら、その子がめつたに出さない大きな声を出して抵抗したのです。私の黒い縁のメガ

ネでなければ承知しないので、困っていると、一人の職員が「メガネをかけなければ話せないようなことは、話す必要はないでしょう」と言いました。私ははつとしました。私は講演に行くのにメガネがないと困ると思いついでいたのです。

でもじきに、N君はそのメガネでなければこの時の気持ちが表示出来なかったことに私は気がついて、メガネを持たないで講演に行きました。それで何も困ったことは起こりませんでした。

F その時から長い年月がたつて見ると、N君のそのときの思いの深さがよく分かりますね。おとなは、聞き分けがないとか、わがままと考えがちですが、あの子なりの亡くなったお父さんに対する追悼の気持ちだと思えますね。

メガネをめぐるトラブル

F 私は途中からメガネをかけ始めたので、親しい子どもたちの興味をひいたのでしょうか、何人かの子どもにも

メガネを飛ばされた経験があります。

自分がメガネを取られて困ったので、お母さんたちが愛育に来るまでの乗り物の中で子どもがよその人のメガネを突然取ってしまったて、驚かれたり、怒られたりしてとても困った話をするのがよく分かるようになります。

M 子どもにとっては、メガネというのは、目を代表するものだから、目に敵意を感じると、メガネに飛びかかって取るのではないかな。

F そういえば、電車の中では、大きな声を出すと他人から睨まれたり、変な子だと思われることが多いですね。

M だから、その人の目に対して攻撃的になるのですよ。

F そうね。その子をめぐってトラブルが大きくなると、その子に対する非難の目が大きくなりますね。それにメガネって高価だし、私のように乱視や遠視や老眼がはいっているとすぐには作り替えられません。一緒にい

る親が本気で焦ってしまう気持ちはよく分かります。

M 朝、登校して来たとき、電車の中でこんな事件があったと泣いて来る若いお母さんもいます。そんなとき、先輩の母親たちがいろいろ慰めたり、アドバイスしています。

F そうそう、私もそれに教えられたり感心したりしました。

M まずは相手の人にこの子の気持ちを説明しながら謝る。子どもの側に立つことのないチャンスだと考えるのですね。

突差のことも、この子を皆に理解してもらおうというも思っていると出来るのでしょうか。お母さんたちは実に立派だと思いますよ。

F メガネはその人に属するものだと知っていると、わざと取って相手をからかうということもありますね。私もからかわれたと思います。笑いながらるのですから。

S 子さんは町でよくメガネをめぐってトラブルを起こ

しましたが、メガネをとると相手が本気で怒ったり、困ったりする。それが面白かったみたい。おとなの仮面をはぎ取るといったら考え過ぎかしら。

M 私は普段はメガネをかけていないけれど、子どもに本を読むときはかけます。

F 子どもが取ったりしませんか。

M それはしよつちゆうだけど、メガネを壊されたことは一度もありません。私はすぐ渡してあげるから別にもめることはないなあ。

メガネを突然取られたら知らない人は誰だつてびつくりしますよ。

F メガネは子どもを見る目の暖かさや、厳しさを強調することにもなるから、子どもにとってつらい思いの象徴のようになるのでしょね。

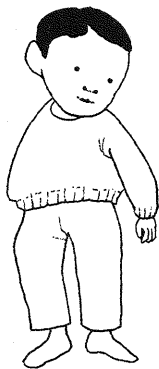
メガネの魔力

M メガネに飛びかかって取ってしまう子どもは、そのメガネをかけている人にも敵意を感じているのではない

かとさつき言いました。メガネとその人とが一緒になつて、その人の目がこわいのか、メガネがこわいのか分かんなくなるほど、メガネの光が異様に輝いて見えるのではないかと私は思うのです。

F 光線の具合でメガネがキラリと光るように思えることがありますね。

M 『保育者の地平』の第4章3に書いたことですが、ベッテルハイムのメガネの考察に私がハッとさせられたことがあります。それは、しばらく休暇をとっていた実習生に、ひとりの女の子が「先生、今日は新しいメガネをかけている」と言ったのです。その実習生はメガネを新しくしたわけではなかったのです。「新しいメガネをかけていませんよ」と答えたのです。それに対して、



ベッテルハイムは、その女の子にとってはそれは新しいメガネと感ぜられたに違いないのに、実習生はそれを否定したことを厳しく批判しました。メガネが新しいのではなくて、女の子自身が新しくなったので新しいメガネのように見えたのだと言うのです。

F なんだかややこしい話だけど、よく考えるとそういうことは普通にありそうですね。

M そうなんです。見る人が変化すると、同じ物が違って見えるのです。新しいメガネと言ったのは、以前には恐ろしかった母親の目かもはや恐ろしくなくなったので、実習生のメガネも新しくなったように見えたのです。

F メガネとそれをかけている人とが分離したのですね。それで異様に光ったように見えたメガネが魔力を失った。

M その通りです。メガネがただの物になったのです。そうしたら飛びかかってメガネを取る必要がなくなりました。

鏡を見るのが好きな子

F 話を鏡に移しましょう。

M 鏡を見るのはどの子も好きですね。鏡を見ると、子どもは自分とその背景とを見えています。鏡に映る姿によつて自分が外からも見ることで存在だということとで、いつそう自分というものが確かになるのです。う。

F あまり泣かない子が鏡の前で「笑いましょ ワツハツハ…… 泣きましょ エンエンエン……」の音楽に合わせて泣きまねをしたり、笑ったりしている姿は心に残っています。感情を表出するのが下手な子が、鏡の前で練習しているように見えました。

M 私も子どもが泣いたり笑ったりして、自分の思いを表現して、それが鏡に映るのを見ておるときに、この子は大事なことを学んでいるのだと思つて見えています。

F 本当はうるさいなあと思つてもあるけれど（笑い）思い直してこんなに表現出来るのは自分の存在に自

信がある証拠と、襟を正すのです。

鏡の中に自分とその背景を見る、といわれましたが背景も含めて見ることが大切なのでしょうか。

M そう、自分だけを見るときはナルシスチックに自分に陶醉していることがあります。極端に自分の姿だけにこだわるのではなく、自分をとりまく人や風景の中で自分を見る。

F 鏡を見ることは自我の成長には欠かせないことでしょう。他人を含めた中で自分を見るときという。

M 一歳八か月のうちの孫が鏡の中にジージの顔が映っているのを見て、笑いました。自分も映っているし、他人も一緒に映っている。それはだいたいな発見ではないでしょうか。

優しい目について

F 愛育養護学校での出来事です。一人の女の子が水たまりに映った空を大声を上げて見ているうちに、だんだん近寄って行って自分の姿が映っていたのを発見しま

した。そのときの喜び、感動は子どもの持っている大事な資質だと思います。「センス オブ ワンダ」と言ってもいいでしょう。私にはこれが将来どんなことに結びつくのか分かりませんが、子どもが大きな自然に包まれる感覚、存在の基礎となることではないかと思います。訓練してできることではありませんね。

M 子どもから学ぶのはそういうことだと思いますね。

F あるお母さんがトイレにいくときいつも後をつけて来る子に、抱きしめて「だーいすき」と言っていたら、その子が一番初めにいった言葉が「だーいすき」だった。その話を聞いたとき、抱き締められながら子どもはお母さんのほつぺたを両手ではさんで、お母さんの目の中に写った自分や回りのことを見ていたと思うのです。

M お母さんの目の中に自分が映っているなんて、いろんな子どもと母親の話の中にでて来るけれど、とてもすてきな鏡だと思う。

せつな系植物楽しよくぶつがく
植物。ぼろ。ぼろ



絵・文 群馬直美

オニ葉にんじん

野菜の葉っぱもいいものです。

特にスキなのがニンジンの葉。以前訪れた自給自足村のお宅のお勝手に、レース状の葉がどっさり。繊細な美しさで輝いていた。

「これは何の葉？」

「ニンジンよ」

おお！ と息を呑み、そのときからファンになった。ピーター・ラビットが遊んでいそうな、可憐な可憐な葉っぱなのだ。

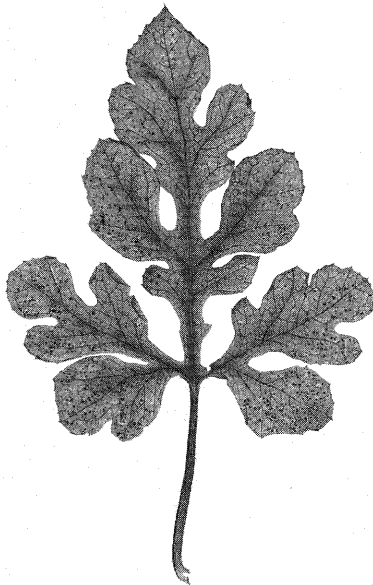
スーパーや八百屋さんの店先に並ぶ野菜くんたちは、みんな葉っぱを落とされて……この子

にはどんな葉っぱがついていたんだろう？ ビニールやスチロールのバックに詰められた野菜くんたちは、お行儀よく、どの子もつぶらな瞳でこちらを見つめている。多少の大きさの違いはあっても、みんな生真面目に立派。……あれえ？ と思う。

「あれえ？ こんなだったっけえ?!」

ぐわーんと、幼き日の八百屋さんの店先にタイム・スリップ。

黒々とした土間に古びた木の台。その上に萎びたような野菜くんたち。ときには、もうダメですと腐っているものさえも。どの子も、大きさも形もテンデンバラバラ。薄暗い店内には、何本も蠅取紙が吊るされ、それなのに野菜くんたちの周りにはぶんぶんハエが



スイカ（多摩川近くの老人ホームの菜園にて 2000.7.23 採集）

飛んでいた。灰色の着物を着た背の高いおばあさんが、蠅取を持ってハエを追う。店の奥座敷には、ソテツのようなおじいさん。開けた障子戸越しに、ふぞろいな野菜くんたちを静かに見守りながら、湯飲みで酒を飲む。この八百屋の店主こそ、何を隠そう私の祖父。そうなのだ。昔はこんなふぞろいでデコボコしたものであふれていた。

野菜も道もデコボコ。大人も子どももデコボコ。金持ちも貧乏人もみんな一緒くたになって生きていた。雨が降れば道はぬかるみ、みんな泥んこ。日照りが続けば、土埃にゴホゴホ。夏には毎日、物凄い夕立。雷さまの迫力満点な太鼓の演奏に、おへそをかくして怯えたり、冬は冬で、からっ風。川は竜巻を起こし、屋根は飛ばされ、だからどこの家の屋根にも大きな石がたくさん載っていた。自然環境もかなりデコボコ。

木の葉も老木ともなると、葉っぱの周りのギザギザ加減も丸みを帯び、小振りになる。地球環境もそうなのか？ とはいえ、たかだか何十年かでこの自然環境の変貌振りは、とても不気味だ。

それでも一本の木を覗いてみれば、葉っぱはどの子もみんなデコボコ。元気いっぱい葉っ

ぱ。ちょっと疲れて半分枯れちゃっている子。虫に食われて穴だらけになっているもの。病気の葉っぱさん。いち早く色づき秋モードになっている子。共にある美しさ、やすらぎがここにある。これが自然なんだと、ホッとする。

こんな自然を体の中に持った人たちと出会った。

実は私はダンスもやっていて、何年か前から「共に歩むネットワーク」主催のイベントで踊らせてもらっていた。「障碍はひとつの個性！障碍を持った人も持たない人も共に生きられる世の中にしていきたい」との熱い思いで、青木優・道代ご夫妻が何十年にもわたり行っている活動のひとつなのだ。そこでまた、踊ることになった。でも、ここ数ヶ月私は全く踊れなくなっていた。何をやってもしっくりこない。心が踊らない、弾まないのだ。

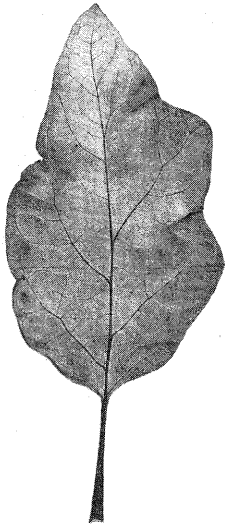
そんな時、たまたま友人に連れて行かれたライブ会場でその出会いがあった。ピアノとギターと和太鼓という奇妙な編成のバンド。この和太鼓におおっ！ときた。なんとまっすぐな音を打つ人なのだろう。この太鼓とどいたら踊れるかもしれない。継るような思いで声を掛けてみると、その人は生まれつき耳の聞こえない人だった。聾学校にも行ったけど、まだ小さいうちに普通の小学校に移りそれ以降、健聴者の中で生きてきたのだという。

「いろいろな方たちのおかげで、今の私はあります」

まだ二十三歳という若さで、こんなことはなかなか言えるものではない。本当にいろんな人たちに助けられてきたのだろう。一緒にいた彼の幼なじみの友たちも、体

の中にもっすぐな音をそれぞれ持っているようだった。このまっすぐな音は、一体何なんだろう？

イベント当日に分かった。聾や健聴の大勢の友人たち、家族総出で応援にかけつけ、人々との暖かくも太い絆で痛いほどだった。その光景は一本の見事な木。これが人の世の自然な在り方なんだ。私を感じたまっすぐな音。それは、たくさんの人たちの心の響きあう音。そんな豊かな音に手をとられるようにして、私は無心に踊っていた。……ふぞろいな野菜を見つめ



ナス（ルーマニア、ピシュテア村、エリザベータさんの庭にて
2000.8.5 採集）

ていた祖父の眼差しを懐かしく想い起こした。

私は祖父のリヤカーをどうしても押せなかった。薄汚れた作業着、地下足袋姿でポロポロのリヤカーを引いて市場に行く祖父。恥ずかしくていつも知らない人の振りをして追い抜いた。

休み時間、教室の窓から、重そうなりヤカーを引き店に帰る祖父の姿が見えた。夕方、八百屋に行くとい升瓶片手に、すでにほろ酔い加減。ガンバルおじいさんと、ガンバラナイおじいさん。両方の姿をありのままに見せてくれた。

もうじき死んでしまうと見舞いに行つたとき、私の顔を上げしげ見ながら「知らねえなあ」。これが私の聞いた祖父の最初で最後の言葉だった。

何にも話さなかったのに……祖父のふぞろいな野菜の精神性は、しっかり私の内に培われて

いた。「この世の中のひとつひとつのものは、全て同じ価値があり、光り輝く存在である。無駄なものなど何ひとつとしてないのだ」と私は、虫食いや朽ちた葉をありのまま丹念に描いているのだから。そして彼らの美しさに日々、驚かされている。(葉画家)

和太鼓・SEKINE MOTONARI

<http://homepages3.nifty.com/sweet-potato/>

『木の葉の美術館』<http://www.wood.jp/konoha/>

☆本文中の絵は筆者による

スイカ 紙／テンペラ SIZE:332mm×240mm

ナス 紙／テンペラ SIZE:225mm×158mm

「くり返し」のおもしろ

— 〇歳児クラスの生活より —

田辺 敦子

乳児保育に携わっていると、日々の生活の折々に、子どもたちの中にこれから育っていくであろう「遊びの根源」に出会うことができます。「遊びの根源」、そう、幼児期の子どもがいつも簡単に表現している遊びのエッセンスは、幼児期になって突如出現するのではなく、子どもの成長と一緒に、乳児期の頃から、生活や遊びの中で積み重ねられ、徐々に育まれていくものです。

一見単純に感じる乳児の生活ですが、実は、情緒的に安定した環境の中で経験していく、その単純な「くり返し」のスタイルこそが、「遊びの根源」を導き出すヒントの宝庫となっているのです。更に、乳児の「遊び」は、彼らの「生活の中の行為」と非常に密接

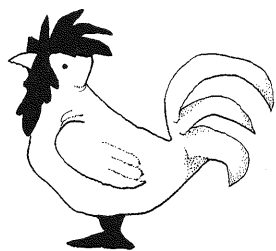
な関わりがあるということを日々感じていきます。

「バイバイ」を味わう

Kちゃんは、生後十一ヶ月の女の子。毎朝、お母さんかお父さんのどちらかと一緒に保育園へ登園して来ます。まだ自分では「おはよう」の挨拶をすることはできないKちゃんですが、お母さんやお父さんに抱かれながら、お父さんたちが保育者とのような挨拶をし、どのような仕事でやりとりするのかを、じつと眺めています。

私たちは、お父さんたちが保育室を出る時に、「いつてらっしゃい、お気をつけて」とお見送りするのですが、その際Kちゃんにも、「パパ（ママ）にいつてらっしゃいしょうね」といつも声を掛けるようになってきました。もちろんKちゃんは、まだ「いつてらっしゃい」とは言えないので、私たちがKちゃんの代わりに手を振ってバイバイをし、お父さんたちも、それに応えてバイバイをして下さっていました。

すると、いつの頃からか、お父さんたちが保育室から出て見えなくなると同時に、Kちゃん自身も手を振るようになり、続いて数日後には、大人の「いつてらっしゃい」「いつてきます」の言葉に応えて、手首を返しながらのバイバイをするようになりました。（前者は視覚的に、また後者は言葉そのものによって、Kちゃん自ら「バイバイ」を



するシチュエーションを判断したのでしょうか。)そして、そのようなKちゃんの様子に感
激した大人の「バイバイできたのね」「素敵ね」という感嘆の声も加わり、いよいよK
ちゃんも「バイバイ」するという行為の楽しさを覚えたようです。

人とのコミュニケーションの出发点を体験したKちゃんは、それからというもの、誰か
がKちゃんの傍から離れるときや大人がおもちゃを片付ける時などにも、「バイバイ」と
手を振ってはにっこりと笑うようになりました。「バイバイ」をタイミングよく表現する
事に、遊びの要素を見出したのでしよう。きっと、この「バイバイ」を遊びの中でくり返
していく事で、これからも様々なバリエーションの「バイバイ」に出会っていくこと
でしょう。

食べたい気持ちに誘われて

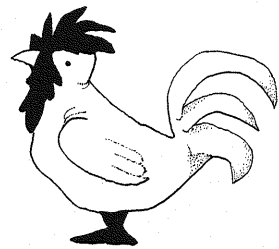
私の保育園では、乳児保育における育児担当制をとっています。食事についても、毎食
決まった大人(担当保育者)と食べることで、子どもが安心して食事に向かえるようにし
ています。また、担当制をとることによって、保育者自身、栄養士や看護婦と共に、一人
一人の発達段階や、食事の進め方(食事の時間や調理形態、食事の量など)をしっかり確
認しながら、その子にあった食事をコーディネートしていけるようになっていきます。離乳
食を進める〇歳児の食事では、一対一の関わりの中で、尚のこと丁寧な食事になるよう心
掛けています。

さて、Mちゃんは、私が担当している生後十ヶ月の女の子。
三人兄弟の末っ子で、日頃からお兄ちゃんやお姉ちゃんからの
刺激を多く受けていることもあって、生活力もあり、遊びに対
しても非常に能動的な姿を見せています。

そんなMちゃんは食事面でも積極的で、食事のテーブルに着
くと、まず、大人の膝の上に座りながら、テーブルに用意され
ている食事の方に身を乗り出して、「今日のおかずは何かな？」
と、確認します。私は、毎食とも、Mちゃんのこの確認作業が

一通り済むのを見てから、Mちゃんに食事用のエプロンをつけて、最後に口と手を拭いて
から、「いただきます」をするようにしています。実は、担当者との信頼関係があること
で表出される、食事前の一連の行為が、とても興味深く面白いのです。なぜならば、こ
ちよっとした一連の行為の中にも、Mちゃんの成長の姿が見られるからです。

少し前までのMちゃんは、私が言葉掛けをしながら行為を進めていく間、私の顔と食事
の方とを、交互に見ながら「いただきます」を待っていました。例えば、「おててを拭こ
うね」と言葉掛けした後も、私の方から手を伸ばしてMちゃんの手を取り、テーブルの上
に出してから拭いていました。もちろん、今の段階では、これが普通ですし、むしろ丁寧
な言葉掛けと共に、これらの行為を大事に積み重ねていくことが重要です。しかし、この
頃のMちゃんは、もう少し先を見通せる主体的な様子を見せるようになってきました。そ



れは面白いことに、Mちゃんにとって好物揃いのメニューの時や、お腹がとても空いている時によく見ることができのですが、そういった時は、私の言葉掛けよりも先行して、Mちゃんの方から食事に向かう姿勢を見せてくれるのです。例えば、「エプロンをしようね」と言うとすぐに背筋を伸ばして、エプロンのゴムが首に通りやすいようにしてくれます。また、私がオシボリを手にする前に、口を前のほうに突き出し、手もすぐに拭けるように、テーブルの上にはっと出して待っていてくれるのです。そして、「いただきます」と言うやいなや、再び体を前に乗り出して、笑顔で体を揺らして「あれが食べたい」と目線や指差して教えてくれるようになりました。

Mちゃんは、早く食べたいという思いから、行為を省略してしまおうとするのではなく、大人と一緒に育んできた習慣を、今度は自らが参加するという積極的な姿勢で示したのです。今まで積み重ねてきた「くり返し」は、このMちゃんの成長によって、よりリズムカルになり、食事に向かおうとする気持ちも一層高まってきたように感じます。子どもは、食べることが生きることに関係するという事を、マナーを体得し、社会性を広げていく、このような体験を通して理解していくのでしょうか。

この事例は「遊び」とは類を異にしますが、「遊び」も「生活の中の行為」も、子どもがその対象に対して、どのような姿勢で取り組んでいるか、という点で捉える際には、同様のことが言えると思います。この場合のMちゃんの姿からは、子どもが遊びを自分の世界に引き込んで行く時に見られる、心地よい真剣さのような意志の力強さを感じました。

ちなみに、数日前から、Mちゃんは「いただきます」の時に両手を合わせることも楽しみ始めました。ご家庭での、食を大切に
する心が伝わってきます。

やっぱり落ちてきた！

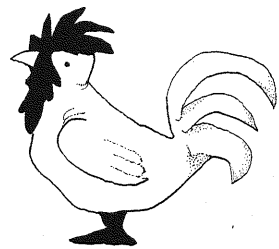
ゆったりした時の流れる乳児室ですが、わらべうたの遊びを満喫している子どもたちの姿を見ると、一層ゆったりとした心持ちになります。そして、自分がその遊びの中で子どもたちと

関わると、今度は、次々に変化していく子どもの表情に感心してしまいます。

子どもたちが大好きなわらべうたのひとつに、こんなわらべうたがあります。とても短く、出てくる音もレとドだけなので親しみやすく、子どもたちが何度もくり返して遊ぶことのできるわらべうたです。

ふうえから　したから　おおかせこい　こい　こい　こい！

私たちは、よくこのわらべうたを歌う時に、薄い素材の布を使います。うたに合わせ、子どもの頭の上で布を動かして風を表現します。私はよく、このうたの最後のところで、布を子どもの上にふわりと掛けます。すると、はじめの頃はちよっぴり驚くのですが、何度か試すうちに、子どものほうから先に目を瞑ったり、笑顔をつくったりしながら、布が落ちてくるのを待つようになります。そして、今か今かと楽しみにしている子ども



もたちの期待に応えて、タイミンクよく布を離すと、「やつぱり落ちてきた！」と言わんばかりに、全身を動かして反応を示してくれます。すこし慣れてきたら、今度は、布を離すタイミンクを変えたり、もつと厚い布や肌触りの異なる布を使用したりして、子どもたちの更なる興味を誘う事もあります。また、このわらべうたを聴きつけて、「私も！」というように近づいて来る子がいる時には、順番に布を掛けてあげます。そうすると、自分の番になった時には、本当に嬉しそうに布を受け止めてくれます。待つ事の幸せや、順番が巡って来る事の喜びを感じとっているのでしょうか。

子どもたちは、くり返しを楽しむことで、次のシーンを予想することが可能になり、自分が予想し、期待したことが実現されるまでの、程よい緊張感と、実現されることによる満足感を、バランスよく味わうことができます。そして、そこから子どもたちは安心と信頼の心を得ることができ、その満たされた状態が、新たな好奇心へと繋がっていくのでしょうか。

ここに挙げた三つの事例は、どれも日々の保育の中で見られる、ごく小さな出来事のひとつです。しかし、子どもたちにとっては、このような小さな出来事こそが大きな発見であり、重要な経験なのだと思います。私は、これからも、乳児保育に携わる保育者として、小さな出来事に喜びを感じながら、子どもと共に沢山の「遊びの根源」を見つけていきたいです。そして、様々な根源が共存している事に目を向けていきたいです。（かしのき保育園）

ある日

撮影・平野 清





子どもと出会う(6)

聴くということ

岩田 純 一

子どもの声を「きく」ことは、子どもを「みる」ことと並んで保育実践の原点でもある。しっかりと「みる・きく」ことが、子どもの心の動きをよりよく知ることに繋がるからである。

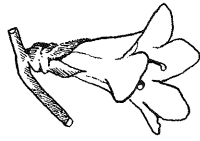
ところで保育の場におけるコミュニケーションは、やはり言葉がよりどころとなる。それは、「話す」「きく」という相互の行為からなっている。しかし、保育

の場ではどちらかというところ「きく」よりも「話す(表現)」ことに主眼が置かれてきたように思われる。保育者は子どもにどのような豊かな言葉かけをするかといった保育実践や、子どもがじぶんの経験や考えをいかに筋道立てて話せるようになるかといった言葉の面がより重要視されてきた。それは、おそらく「話す」に比べて、「きく」がたんに相手の言葉を受けとる

だけの受動的な行為とみなされてきたことによるのかも知れない。したがって保育のなかでは、どちらかというところ「訊く」といったことに保育の関心があったように思われる。それでは、「きく」という行為は受動的であり、「話す」ことに比べて、それほど重要ではないのであろうか。

「聞く」と「聴く」

ところで、今までは「きく」とひらがなで表記してきたが、この「きく」には微妙に異なった意味を区別する二つの漢字がある。それは「聞く」と「聴く」である。一般的によくみかける「聞く」は、へきくとはなしにきこえてくる」といった意味をもっている。聞



き違え、聞き流す、風聞、伝聞、新聞といった言葉をみれば、その意味のニュアンスがよく分かっていただけるであろう。それに対して後者の「聴く」は、耳を傾けて注意してきく、耳

を澄ませてきくといった行為を意味している。それは、傾聴、拝聴、静聴、聴診器、聴取などの言葉をみれば明らかであろう。

それでは、われわれの日常会話のなかの「きく」行為を振り返ってみよう。よくみると、往々にして、われわれは相手の話すことを聞いてはいるが、聴いてはいることが多いのではなからうか。人はすでにじぶんなりの考え、期待、信念、欲求、知識といった枠組みをもってきいている。したがって相手の話を、じつはそのようなじぶんの枠組みをくぐらせてきいてしまう。相手の話すことをじぶんの枠組みを介して受けとめ、意味づけることになるのである。その結果、知らず知らずに、相手の話をじぶんの都合のよいような勝手なきき方をしてしまっている。じぶんのききたいことだけをきき、じぶんのモノサシから相手の話を評価的に裁断しながらきくことにもなりかねないのである。また、われわれは相手の話すことを十分に聴く前に、相手の話を取ってじぶんの考えや意見を話

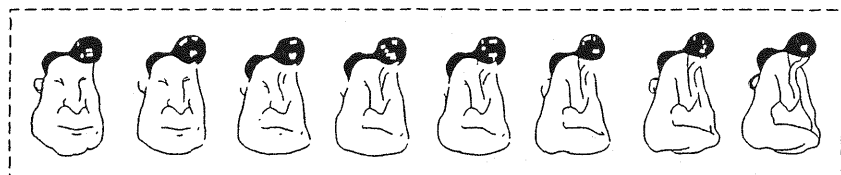
すことに腐心していることが多いのではなからうか。

先に保育実践の原点として、「きく」とならんで「みる」を保育の原点としてあげたが、「みる」も同じようなことがあてはまる。一般的にわれわれは、じぶんの欲求・期待・情動といった主観的な枠組み（モノサシ）に拠った見方をしがちである。下図をみていただきたい。右端ないし左端だけの図をみると、それぞれ明らかに女性像と男性の顔にみえる。ところで、中央の絵は単独でみせられると、男性の顔にみえたり女性像にみえたりが人によってちょうど半々くらいである。しかしながら右端の女性像からスタートして左へと順番にみせられていくと、中央を過ぎても女性像にみえ続け、逆に左の男性の顔から始めると中央を過ぎて明らかに女性像に変化したにもかかわらず、なお男性の顔にみえてしまうのである。

このようにじぶんのもつ先入観・先入見などに基づいた思い込みの強い見方をしていることがうかがえるだろう。あるがままをみることの難しさがわかるであ

ろう。ヒトはいつもじぶんがもっている内的なモノサシからきいたり・みたりしてしまうのである。それが現実をみる目を曇らせ、とくとして現実を歪めて捉えさせることにもなる。とくに人が人を見る場合には、

だからこそ、人を色メガネで見る、レッテルをはって見るといった偏見が社会的な問題になつてもくるのである。このように考えると、じぶんの枠組み（我）からみる・きくのではなく、そのものをそのものとして、そのことをそのこととして「みる・きく」がい



▲図 男性の顔と女性像 (Fisher, 1968)

かに難しいことであるかが理解していただけるだろう。たとえば、身体に障害や不自由を抱えている人が、その不自由さを訴えても、健常である者には、ほんとうにその立場（身）になってその不自由さを視る・聴くことがいかに難しいものかを思い起こせばよいだろう。

保育の場においても、子どもの声を聴くことの難しさもここにある。保育者が、じぶんをモノサシ（基準）にして聞けば、子どもの声を聴くことはできない。そのような「聞く」は、じぶんの思い・先入観を押しつけた、ともすれば一人よがりなきき方に陥ってしまうことになる。このようにみると、子どもの話したいことをそのまま受けとる、子どもの言葉にほんとうに耳を澄まして「聴く」ということは、じつは存外と難しい保育行為のように思える。

「聴く」ことと条件

それでは他者の声を「聴く」ためにはどのような条

件が必要になるのであろうか。哲学者の鷲田は、相手の話すことを無条件に、無条件の肯定として受けとめる、すなわち相手の話に自己を差し出すことであり、無条件に相手を迎え入れることであるという。それには、じぶんの同一性への固執、つまりじぶんというもののへのこだわりを捨てて、相手にじぶんを差し出し、相手をじぶんのなかへすっぽりと迎え入れる態度が必要となる。したがって「聴く」ということは、少なくともおのれの同一性（我執）の外へ出る用意があることを意味している（鷲田清一著『「聴く」ことと力』TBSブリタニカ、一九九九）。それは、相手に身をおいて、相手の身になって「きく」のである。

犬の散歩を例に考えてみたい。こちらに余裕がないと、こちらの都合に合わせて犬の散歩も早く切り上げ犬を引っ張るようにして帰ってくる。犬を散歩させてはいるけれども、まさに気もそぞろな私にとつて犬（の気持ち）などは不在である。しかし、こちらに余裕があるときは、引っ張るにまかせて犬に付き従い、

犬の身になって同じように動くことが可能である。すると、今、犬が何に関心があり、何をしたいのかといった犬の気持ちを手綱を通して伝わってくる。まさに、じぶんのペースを捨て、無条件にじぶんの時間を相手にあげるとき、犬の心を「聴く」ことができるのである。同じようなことは、保育者と子どもの日常的なかかわりのなかでも言えるのではなからうか。

このように「聴く」ことが、話し手にとって癒しの働きをもつことも臨床的な経験から明らかである。話してどうなるものでもなく、相手にどうこうしてほしというものでもないが、とにかく一人では背負いきれないじぶんの辛さ、不満や心配事を相手に聴いてもらい、受けとめられたと感じるだけで気持ちがいちり、ときに癒されるといったわれわれの経験を思い起こせばよい。ときに、それがその人の生きる力を支えていく助けにさえもなるのである。また「聴く」ことは、話し手にとって、じぶんのことばがたしかに受けとめられ、相手がじぶんとともに感じてくれている、

じぶんが相手と繋がっているという実感をもたらず。そのなかで話し手は、その聴いてくれる他者の胸をかきながらじぶんと向き合い、じぶんの気持ちを整理・理解していく助けになるのである。

じぶんの考えや価値観にこだわり、それを話し手に押し付けながら聞くのではなく、そのようなじぶんへの枠組みへの固執を捨てて（殺して）、ただその場に一緒に臨み、相手の声にじつと耳を傾ける。そこにこそ、話し手にとってはじぶんの言葉を受けとめ、共に考え、共に感じてくれる他者が立ち現れてくるのである。そのとき話し手は、じぶんの本音をポツリポツリと語り始めることになるのである。これがまさに受容としての「聴く」であり、まさにきき上手とはこのような「聴く」をいうのであろう。心理臨床の場面では、このような「聴く」という行為が根幹を成し、そこにクライアントとセラピストの心が繋がっていくのである。このような聴く態度は、臨床的な場面だけでなく、保育実践のなかでは子どもとかかわる保育者の

重要な技能となるように思われる。

保育のなかで「聴く」

「聴く」ことの難しさは、子どもとやりとりする保育者にも同じように言える。保育者がじぶんという我へのこだわりを離れて子どもの声に耳を傾けて「聴く」ことが、やはり子ども的心とほんとうに出逢い・繋がっていくことを可能にさせるのであろう。

そのような「聴く」は、保育者が子どもの身になって共感的に臨むということである。それは保育者が子どもの立場になって、子どもの身からじぶん自身を対象としてみつめ直し、捉え返すといった自己の相対化を可能にしていくことでもある。保育者が子どもという鏡から、子どもにとってのじぶんをみつめ返すのである。そこに、保育実践を通して保育者自身も育つといった契機が生み出されていくように思われる。また、子どもを無条件の肯定としてじぶんの内に迎え入れることは、子どもからも保育者がその内に迎え入れ

られることに繋がっていく。まさに保育者と子どもの信頼関係も、そのような関係性のなかでこそ培われていくように思える。

ここで少しコミュニケーションのことに話を戻してみよう。コミュニケーションは、「話す」と「きく」という行為からなっている。しかし、どちらかというと保育のなかでは、「きく」の重要性が「話す」に比べてはそれほど唱えられてこなかった。このことは最初にも述べた通りである。それでは「話す」という行為を考えてみよう。

一般的な会話・対話のなかで、そもそも相手に何かを話すという行為は、そのやりとりのなかで相手に「応じる」ことではなからうか。保育の場においても、保育者が子どもに話すのは、子どもの声を「きく」ことのリアクションとしてある。すると、うまく



へ応じるゝためには、まずへ受けとるゝことが、その出発点にあるように思われる。しつかりと子どもの声を「聴く」ことこそ、それにうまく応じて「話す」と、すなわち、そのときに子どもがもつとも求めている言葉、子どもの心に届く言葉が話すことができるのではなからうか。さもなければ、保育者は子どもの思いとはズレた、トンチンカンな応答をしてしまうことになる。

そのように考えてみると、まさに「話す」ことは「聴く」ことから始まるといつてもよいのではなからうか。子どもにとつても、じぶんの話を傾けて聴いてもらえる経験の積み重ねが、人の言葉をしつかり「聴く」力を子どもから育み、さらに相手に応じてしつかり「話す」力を培っていく基盤ともなっていくように思われる。子どもはじぶんの思いを受けとめ、それに耳を傾け共感的に聴いてくれるからこそ、さらに話そうとするのである。それが、子どもから言葉をひきだし、話す力を育てていくように思われる。

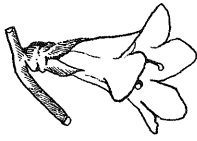
「聴く」ことは、子どもの心を聴こうとすることである。したがって、その意味では「聴く」という行為が、たんに音声としての言葉だけにとどまらず、言葉にともなう表情や身振りといった身体全体の表現をトータルな声として受けとめなければならぬ。このような「聴く」という行為は、まさに身体ごとスッポリと子どもを迎え入れる態度・姿勢にあるとき成り立つように思われる。

さいごに

保育者の「きく」といった行為には、副次的な重要性しか与えられてこなかった。しかし、ここでもう一度、子どもの声を「聴く」という受動的にみえる行為の意味を問い直してみる必要があるのではなからうか。もちろん保育の場では、保育者がイニシヤティブを発揮し、子どもの行為を方向づける適切な保育者の言葉が求められる。しかしながら、この保育者の言葉があまりにも一方的になってしまうと、ときに子ど

も本来の能動性や主体的な声を犠牲にしてしまう危険性をあわせもっているのである。保育者の言葉が支配的になればなるほど、子どもを受動的にさせてしまうことにもなってしまうのである。保育者が一方的に話せば話すほど、子どもは話さなくなり、また保育者の速射砲のような大声に耳を傾けて聴くといったこともなくなってしまう。その結果、保育室には子どもへの指示・命令の言葉で喉をからした保育者の声だけがむなしく響いているといったことにもなりかねない。これは、保育の現場においてしばしば見聞きするところである。

このように考えると、保育者が「話す」といった行為だけでなく、子どもの声を「聴く」といった側面が保育にとつてもつ意義をもう一度見直してみる必要がある。じつは子どもの声を「聴く」といった保育者の受動（受容）のなかでこそ、子どもはじぶんが受け入れられているという所在感



を抱き、そこで子ども自身の主体性・能動性が動き出していくのではなからうか。そのような保育の場づくりこそ、子どもが保育者とのみならず、仲間と活発に向き合っていく力を育むのではなからうか。その意味で、子どもの声を聴く保育者の姿勢や行動は、一見すると受動的で静的なようにみえて、じつは保育者から子どもへのもう一つの重要な能動的な働きかけではなからうか。

（京都教育大学）

その十

嶺村 法子

それぞれのグループで考えた「お願いの言葉」を言いました。

グループごとに前に出て

ちよつと緊張しながら

一生懸命に声を出す

「お兄さんお姉さん、お芋を植えてきてください。お願いします」

「お芋を楽しく植えてきてください」

「苗をそおつと優しく植えてきてください」

「ケガをしないように行ってきてください」

「元気に行ってきてください」

「秋になったらお芋を食べに来てください」

「楽しみに待っています」

この柏学園での宿泊の目的のひとつに、サツマイモの苗植えがあります。秋の芋掘りのために、自分たちの苗だけでなく、幼稚園児の苗も植えてきてくれるのです。

出発の前日、四年生の教室を訪ねた年長児は、

キュウリやナスの苗を植えたときに

私が言った言葉が

トミカラひろば

こんな所で飛び出してくる

お母さんにいつも言われている言葉が

お兄さんお姉さんの苦笑を誘う

四年生の先生が

「私たちが言うより、幼稚園の子にいわれた方

がよく聞くみたい」

と笑いながらおっしゃった

教室を見渡すと

幼稚園時代の懐かしい顔

「『おいもパーティー』覚えてる？」

「覚えてる！」

「蜂蜜とか生クリームとか乗せたよね」

「そう、そう」

四年生を招待して開いた

『おいもパーティー』から四年がたち

今度は君たちが苗植えに行く番

そしてお礼に招待される番になった

「また『おいもパーティー』するから来てね」

「うん！」

翌朝

大きなりユックを背負って

バスに乗り込む君たちが

なんと頼もしく見えたことか

初めて出会った三歳の頃を思い出し

七年の年月が改めて胸に迫る

元気に帰ってきた日

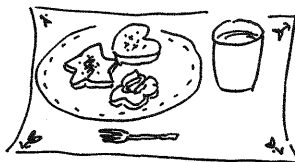
通りすがりの廊下で

「幼稚園の分も植えてきた

よ！」

と言ってくれた弾んだ声が

忘れられない



◆◆◆◆ TO・NI・KARA ひろば ◆◆◆◆

さあ その君たちのために

今年の「おいもパーティー」は

どんな風に進めていこう

あれこれ考えながら

今までの「おいもパーティー」を振り返る

サツマイモをふかす

薄く切って型を抜く

星や花や小鳥やツリーや

いろいろな形のサツマイモに

生クリームや

マーガリンや

チョコレートソースや

蜂蜜を乗せて

その上から

色とりどりのシユガーをトッピング

誰が何を配るとか

私にやらせてくれないとか

大騒ぎの末に準備完了

四年生の手をつなぎ

遊戯室に案内する

一緒にテーブルを囲み

おしゃべりに花が咲く

お礼にと四年生が見せてくれたOHP

『グリーンマンントのピーマン・マン』

学級で取り組んできた成果が

気合いの入った迫真の台詞に表れる

感想を聞かれ

「ぼくはピーマンが嫌いだけど、今度食べてみ

ようと思いました」

ヒロくんが力強い声で宣言した

別の年

◆◆◆◆ TO・MI・KARA ひろば ◆◆◆◆

四年生の歌声に

しんと静まりかえった子どもたち

終わった後は

割れんばかりの大拍手

歌の後のマジックショーでは

「????」

見開いた目が驚きに満ちていた

それからしばらく手品が大はやり

子ども会でも取り組んだ

四年生は

自分よりずっと小さい子どもたちが

一生懸命取り組んだことに

素直な感想を寄せてくれた

「幼稚園なのにお菓子が作れるなんてすごいと
思いました」

「サツマイモが星の形とかになっいて、かわ



▲「ひとり3こずつだよ」「何の形にしようかな？」

ト・ミ・カラ　ひろば

良かったです」

「蜂蜜のお芋が一番おいしかったです」

年長の子どもたちは

自分たちにできる形で

お礼の気持ちを表せたこと

その気持ちを受け止めてくれたことが何よりうれしくて

「喜んでくれてよかったですね」

「おいしいって言ってくれてよかったですね」

「またやりたいね」

と笑顔になる

幼稚園から小学校へ

小学校から幼稚園へ

日常的なかかわりの延長に

互いに育ち合う

“おいもパーティー”の一日がある

小学校の先生たちとは、併設の幼稚園ならではの付き合いがある。職員室や玄関でのちよつとした立ち話にも、幼稚園から送りだした子どものことが話題になる。学期末の納め会や忘年会など、子どもから離れた場所でもあれやこれやと話が出る。一人ひとりの成長を感じるときもあれば、幼稚園時代からの課題が形を変えて現れているのを感じるときもあり、一喜一憂しながらも話は尽きない。

そうした日々の付き合いが、教育活動としての交流を支え、事前の打ち合わせにも反映される。一方が他方に合わせるのではなく、互いにとって貴重な学びとなるような交流をこれからも目指していきたい。

(中央区立月島第一幼稚園)

手づくり活動の楽しさ

すばらしさ(8)

浜本昌宏



▲図2

ています。

暑い時は、それを扇

子のようにして活用し

ます。

下の図2の「かさこ

地藏」の劇に出演する

こどもの案内状は、胴の部分を開くと、その日のプログ

ラムに、「ぼくお地藏さんになるから必ずみにきてね」

と書き添えがありました。

くじゃくを飼育している園では、図3のような開く

と、くじゃくが現れる

案内状をつくりまし

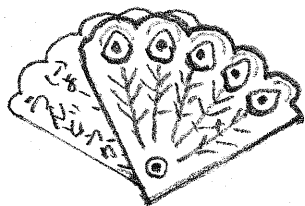
た。尾羽根のところ

にプロگرامがあり、家

族で手にとり会話が弾

みますよう。

(元三重大学)



▲図1

園で催される、運動会・展覧会・生活発表会・演劇祭
りなどの案内状を、こどもの心のこもった、手づくりの
独創的なものにしてみてはいかががでしょう。

すでにそれを、立体デザイ

ンで実践されて好評を得てい

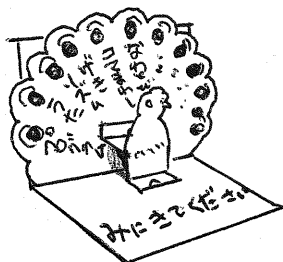
る園がいくつかあります。

上の図1が示す案内状は、

くじゃくの羽根のように描か

れています。横に開くとプ

ログラムが読めるようになっ



▲図3

保育の見なおし三年目

— 指導計画の変遷から —

入江 礼子

見直しの痛み

園で保育の見直しを始めて三年目に入った。二年を終えた段階で見直しを始める前からいた保育者五人のうち三人がいろいろな事情で園を去った。今年度に入って間もない五月末の段階で更に一人が家族の看護をしなくてはならない状況となり園を去った。私が園

長兼任になる前からの保育者はたった一人になってしまった。

それぞれの保育者が園を辞めるにあたってはいろいろな事情があったとはいえ、正直に言ってしまえば、「家庭持ち」にはきつい職場になってしまったという事実がある。まず、帰宅する時間が遅くなった。それまでは夕方五時には職員全員で帰れた職場であった。

しかし今は四時を過ぎても、時には五時を過ぎても保育者は職員室に戻ってくる事が出来ない日が多いのが実状だ。明日の保育の準備をするとなるとこういう状況になってしまう。

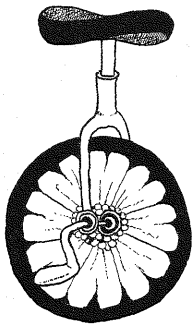
それは一年目の後半から顕著になった。準備をする保育(当たり前といえは当たり前なのだが)に変わるにつれて、子どもたちが思い思いに遊べる状況が少しずつ増え始めた。そうなると保育者は掃除をして元の状況に戻すだけでは保育が成立しなくなったのである。

行事その他にしても例年通りにやることをよしとするのではなく、子どもの状況を見、私たち保育者の思いを勘案したものということになれば一つひとつ見直しが必要になってくるし、新たな準備もいる。過去を参考にはするが基本的には新たに作り出していくということも増え、こうして帰宅時間は徐々に遅くなっていった。また、ある意味ではこの保育現場の伝統を壊

している部分もあるので、優先順位をつけて仕事をすることが難しく、一つ一つ課題を乗り越えていくというやり方でしか進めないという事情もあった。

時間外労働ということになってしまったので、なんとかもう少し工夫をしてやっていきたいのだが、現在でもまだこの状況は続いている。若い担任保育者たちは「この職場は家庭があつたら務まらない」とつぶやいている。私のように担任でない保育者で家庭持ちのものも夫や家族に家事を分担してもらつて何とかしている。幼い子どもがいる保育者や体が丈夫ではない保育者、家族に看護や介護を必要とする人がいる場合は続けるのが困難だ。

準備に準備を重ねる保育者に頭が下がると同時に、このままの状況で良いわけがないと



いう思いも頭をもたげるときがある。「遊びを中心とした保育を展開し、一人一人の育ちを理解した環境作りを行う」ことを目指すということは、こういう痛みのプロセスを通らなければならないのかも思う。みんな得手探り状態であるので、やればやるだけ面白いと思える保育者が残り、面白いかもしれないという思いを持って新たに入ってきてくれた保育者もいるのだが、このままではみんなが潰れるかもしれない。「理念は残ったが、どこかの推理小説の題名ではないが『そして誰もいなくなった』ということが起こりかかない」という崖っぷちに立たされながらの日々である。

そんなことを抱えながら、それでも保育者たちの努力は少しずつ着実に実っているようにも思う。この二年と数ヶ月の間は私たちは指導計画のフォーマットを四回変えた。それはそれぞれ理由があつてのことである。今まで本誌にはこの保育の見直し一年目の、特に

親との関係のところでは書かせていただいたが、今回は園の内側からの保育の見直しの経過を追ってみようと思う。

第一の週日案

一年目四月～三月

園には園日誌や指導計画はあるにはあつたが、担任保育者が書くだけでそれを保育者同士が見合うことも話し合うこともなかったという。そこでまず保育を見直していく上でも、まずは週日案という形で指導計画を立て合い、月曜日に園内研修という形での検討会を持つこととした。第一の週日案はとりあえず園長と副園長からの提案ということでそのフォーマットを決めた。

「ねらい」や「予想される子どもの姿」「今週の行事」といった項目のほかに「環境図と簡単な内容」を置いた。週日案を作り始めた当初から「環境図」が重要であろうことを私と副園長のNさんは考えていた。

担任たちはそこに固定遊具や道具などの位置は記入

したもの、必要な遊具やどの子どもがどんな場所でどんな活動に取り組んでいるかの記入はなかった。ここでは個々の子どもの姿が読み取れず、あまり書く意味がないということが話し合われたのは三週ほど経ってからのことであった。その結果、子ども達が遊びを主体的に選択する時間に、それぞれの子どもたちがどこで活動しているかが視覚的にもわかるように書くということになった。

また二学期に入ると三、四歳児は良く混じって遊ぶようになったのだが、色々な事情から朝の登園後一時間の過ごし方が違う五歳児だけが、なかなか他の学年の子どもと混ざって遊べないという状況が生じた。しかし、この時期にはそれ以上どうすることもできず、異年齢の交流の必要性やそれを支えるチーム保育の必要性は分かったものの、保育の流れを変えるまでには至らなかった。

第二の週日案

二年目四月～六月

二年目に入り、一年目の反省を踏まえ今までよりもより見通しを持って活動できるように週日案を改訂した。項目は「幼児の姿」「週のねらいと内容」「環境の構成」「環境の見通し」「援助」「反省・記録」「保護者との連携」「保育者との連携」であった。新たなことは週日案に記録を連動させたことと、環境図を一枚別紙の形で添付したこと、また保護者との連携欄、他の保育者との連携欄を入れたことである。これは異年齢交流を支えるための週日案ということを意識しての改訂であった。

しかし実際にやってみると月曜日の園内研修の段階では当然、今週分の反省・記録の欄が白紙であり、といて先週分の記録分を読みあうだけの時間的余裕はないことが分かった。環境図が独立し書くスペースが広がったことは、担任保育者がより環境の準備や手

立て、子どもたちがどこで誰と遊んでいるかなど細かく予想して描くきっかけになった。保護者との連携欄には保護者と向き合わなくてはならない問題が書かれるようにはなった。しかしそこまで手いっぱい、最下段に設けられた他の保育者との連携欄を書くには至らず、この欄は置かれていてもほとんど機能しなかった。

第三の週日案 二年目六月から三年目五月

結局詳しく書くことができるようになった第二の週日案ではあったが、現実にはそれを検討するには余りにも煩雑であることが分かり、園内研修の時間だけでは時間が足りず、労力を使う割には保育者全員で検討するには無理がありすぎるということで、二か月ほど使った段階でまた改訂を加えることになった。

今回の項目は「先週の幼児の姿」「週のねらいと内容」「予想される子どもの姿」「環境の構成と保育者の

援助」「環境図（人的環境・物的環境・配慮・子どもの動き等）」「行事及び一日の流れ」とした。

保育後記録は「週の記録」ということで別紙に独立させ、これは皆に回覧することにした。また第二の週日案では別紙になっていた環境図であるが、詳しくは書けているものの別紙であることが他の保育者にとつては見にくいという反省もあり、今回は再び週日案の中に少しスペースを広くして入れ込んだ。

さらに「他の保育者との連携」欄であるがこれが前回全く機能しなかった反省を踏まえて週日案の中心位置に置くことにした。この時期、子どもたちが異年齢同士遊ぶ姿が多くなり始め、保育者間の連携の必要性も高くなったわけである。この欄に書かれる内容は保育者が協力して行わなくてはならない作業の確認や、子どもたちのことで確認しておきたいこと、共通に使



う場所についての確認や提案などであった。しかし何よりもこの欄を中心においたことで、保育者全員がこの欄を注目することになり、週ごとの園内研修の折にもどうしても発言が少なくなりがちな若手保育者の提案の場として、またそれを発端にした意見の発露の場として機能するようになっていった。

週の記録は保育者間で回覧することにより、週日案だけでは分かりにくい担任をしていない子どもたちの育ちがより理解しやすくなり、異年齢で混ざり合うことを目指したティーム保育実践への小さな足がかりとなっていた。

第四の週日案

三年目六月から現在

園内研修の折には特に環境図の検討を中心にして話し合いを進めてきた。第三の週日案は約一年間改訂をしなかったことになる。三年目を迎え、三人の保育者が去り、新しく三名の保育者がメンバーに加わった。

この中には他園での経験者もいる。約七十名の子どもたちとスタートした三年目であるが、四月、五月は子どもも保育者も新しい環境に慣れることと、園の中心の基地を探すことで精一杯の日々を送った。

五月末、園の保育者がそれぞれ「なんだか一つの山を越えたみたい」という印象を持つようになった。そんな状況の中、園内研修の折に、新しい保育者から提案があった。第三の週日案では重複が多すぎ、もう少し簡素化できないかというものであった。「環境図を書く段階で、自分たちは先週の子どもの姿も、予想される今週の子どもの姿も、環境の構成も、保育者としての援助も考えています。だからこの環境図を書く以上、今の週日案にある『先週の子どもの姿』と『予想される子どもの姿』と『環境の構成と保育者の援助』の欄はいららないと思います。残すのは『週のねらいと内容』、『他の保育者との連携』欄と週の流れの部分で十分ではないでしょうか。あとはすべて『環境図』と

して空白のスペースにしたのですが……」。

この提案には他の保育者も賛同の声をあげた。「書くことが多すぎます。自分たちの自由裁量を増やすことで、自分たち自身で選択できるのがいいと思います」。

こうして第四の週日案が生れた。書く内容は担任保育者たちが話し合って決めた。保育の見直しを始めて丸二年が過ぎていた。ここで初めて私たち園長・副園長が担任保育者の話を聞いて週日案の項目立てをするのではなく、担任保育者自身が自分たちにとって使いやすいものを作り上げた。もちろん今の段階では第三の週日案の改訂版という感を否めない。しかし決められたフォームを埋めるという方ではなく、自分たちで取捨選択し、自由裁量を増やしたものにしたいという提案はこの二年間では画期的なことである。保育者間で共通理解しなくてはならない項目はしっかりと残り、あとは自分たちらしくというこの提案は、この日

がくるのを夢見ていた私たちにとっては大げさかもしれないが「天にも昇るほど嬉しいもの」であった。

第四の週日案は学年ごとの共通理解とねらいや内容を話し合うところから作られている。その後は各担任保育者が思い思いに目の前の子どもたちの姿を思い浮かべつつ一週間を振り返り次の一週間を見通しながら作られる。ある新任保育者はそのスペースに「保育者としての課題・目標」を設けた。そして今悪戦苦闘している「保護者との信頼関係をつくる！」ことをその第一に掲げた。ある保育者は「子どもの関係図」欄を設けた。それがあつたことでクラスの子どもたちの関係を担任がどう捉えているかが一目瞭然となった。それを見た他の保育者が「○○ちゃんとうちのクラスの△△ちゃんは今よく遊んでいるわよ」と声をかける。それを見て聞いてまた子どもたちの様子を捉えなおす。そうして出来上がったものを検討しつつ実感することは、「本当に読むだけでそのクラスの様子が手にとるようにわ

かる週日案」になったということだ。読めばできることが増えたことで、園内研修の時間に自分のクラスが今週どう過ごすかということをいちいち説明しなくても良くなった。その分、もう少し、今抱えている子どもの問題や、保育者自身の保育への取組みについて突っ込んだ意見が交わされるようになってきている。もちろんこれも時には痛みを伴うことではある。

おわりにかえて

三年目に入ると、さすがに一年目のように保護者からの保育形態や内容に関する疑心暗鬼は少なくなってくる。それは保育の方針を聞き、それでよいという保護者が子どもたちを入園させてくるからである。そうになると、今後はその内容に関しては不断の努力が要求されるようになる。まだまだ発展途上の若い保育現場である。先にも述べたが、保育にしても、その裏方仕事にしても、優先順位をつけることができるほどの知

恵がまだ蓄積していない。保育の準備あり、書き仕事あり、幼・小・中・高・大とある併設校の連携やら連絡の仕事もある。現場はもういっぱいいっぱいいるのであることは変わらず、週日案を自分たちにとって書きやすくなったからといって、それだけでは仕事は減らない。一クラスが二十人前後でもこんな状態である。保育者一人ひとりが「動く指導計画」の域に達し、保育現場が成熟しなければこの忙しさからは開放されないのだろうか？ 私立園であるという状況で、保育者はバーンアウトせずに今を生き残り、子どもたちとの生活をもう少しゆとりを持って過ごせるような知恵は保育界に蓄積されているのだろうか？ こんなことを思いつつ、保育者たちがなんとか一学期を健康に過ごせるように裏方としての役割を全うしたいと考えている。

(鎌倉女子大学・同幼稚部)

編集後記

秋は遠足の季節です。澄んだ青い

空を見てみると、「こどもの国」へ行つたことが思い出されます。「こどもの国」は都心から約三十キロ離れた、多摩丘陵の雑木林をそのまま生かした自然の遊び場です。イベントが行われる広場、ミニアスレチック、乳牛やヒツジが放牧されている牧場、こども動物園などがあり、一日かかってとても全部は回りきれない広さです。

その中で、わが家の子どもたちが大好きだったのは、牧草の中で遊ぶことでした。そこでの楽しみは百円玉一つ二つもらって、その日遊ぶものを選んで各々買うことから始まり

ます。あるときは、幅十センチ長さ一メートルもあるビニール製の袋状のものを持って戻つて来て、それに空気を入れて膨らませ棒状にしてその端を縛って飛ばしました。

見ると、あちこちで赤、青、白、黄色の同じものが飛んでいます。走りながら砲丸投げのように飛ばしている子、斜面を駆けおりながら飛ばす子、木に引っかかったのを取っている子、大人に飛ばしてもらってその後を追いかけている幼い子もいます。私もその中に混じってやってみると、どこへいくかは風任せでその意外性が面白く、そのとき以来、何度もこれで遊びました。

こどもの国では、こんな素朴なおもちゃ一つで、大きい子も小さい子も大人までもが、一日楽しむことができました。

(仲)

幼児の教育

第一〇二巻 第十一号

(二〇〇三年十一月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十五年十一月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

〒〇三二五三九五五五六一三(営業)

〒〇三二五三九五五五六一三(編集)

振替 〇〇一九〇一〇二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

最新刊

行事別保育のアイデアシリーズ
日々の保育にうるおいと心地よい緊張感を与えてくれる「園行事」のアイデアを豊富に紹介する新実技シリーズ



行事別保育のアイデアシリーズ ① idea series

元気がいっぱい 夏期保育

夏は、子どもたちにとって魅力いっぱいの季節。保育者のかかわり方一つで、夏の魅力がどんどんふくらんで、子どもたちの育ちがもっともっと豊かなものになります。本書は、保育者の発想を広げ、豊かな「夏期保育」を展開していくための「遊びのレシピ集」です。

AB判 96頁
やまもとかつひこ 監修／関西あそび工房 著 定価：本体2,200円＋税



行事別保育のアイデアシリーズ ② idea series

みんなにっこ 運動会

「ふだんの子どもの遊びを運動会種目につなげたい」「見ている人も楽しめるものにしたい」「いつもの種目をもっともおもしろくするためには」など、保育者と子どもたちの工夫が生かされた運動会の新しいアイデアを多数提供。子どもも保護者もうれしい、新しい運動会のヒント集です。

ワークショップりんごの木 著
AB判 96頁
定価：本体2,200円＋税



行事別保育のアイデアシリーズ ③ idea series

心を伝える 入園式・卒園式

どんな入園式・卒園式が、子どもたちや保護者にとって魅力的なのでしょうか。本書は、さまざまな保育の場で行われている「入園式」「卒園式」にスポットをあてて紹介。独自の「入園式」「卒園式」を工夫するためのヒントとなります。

小林紀子 編著

AB判 96頁
定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレール館

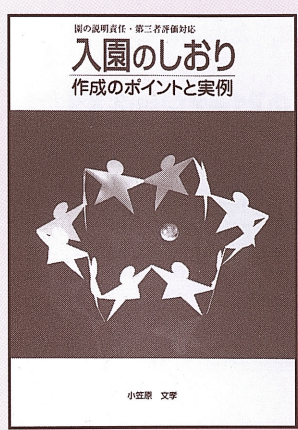
保育所に求められる説明責任・情報公開はどんなこと？

平成15年スタートの第三者評価をふまえた解説が、現場の疑問に答えます！

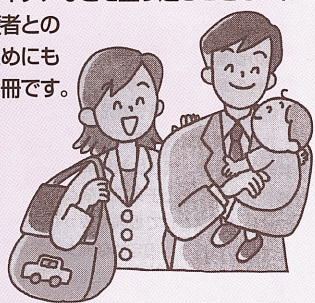
最新刊

園の説明責任・第三者評価対応
入園のしおり
作成のポイントと事例

小笠原文孝 (おがさわら ふみたか) 著

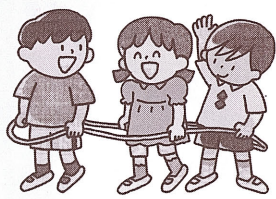


春、保護者に配る入園のしおり(園案内)。どのように構成すれば保護者に伝わりやすくなるでしょうか。その作り方を、事例とポイントを併記しながら解説します。また、家庭での育児の工夫やアイデアなどを盛り込むこともアドバイス。保護者との連携を図るためにも一助となる1冊です。



内容・構成

- 第一章 施設概要～作成のポイントと事例
- 第二章 保育の内容～作成のポイントと事例
- 第三章 保健と健康管理～作成のポイントと事例
- 第四章 家庭との連携～作成のポイントと事例
- 第五章 準備物の案内～作成のポイントと事例
- 第六章 防災と安全管理～作成のポイントと事例
- 第七章 法人の概略～作成のポイントと事例
- 第八章 資料～作成のポイントと事例
- 資料/第三者評価関連



A4判 136頁 定価：本体2,200円+税

キンダーブックの
フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五二四円) ☆